

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02418

研究課題名(和文) 上田秋成の俳諧研究のための資料整備と基礎的研究

研究課題名(英文) The preparation of materials and basic research for UEDA Akinari's haikai research

研究代表者

近衛 典子 (KONOE, Noriko)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：20178297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：上田秋成は『雨月物語』などの小説作者として著名だが、若い頃より俳諧にも親しみ、「独り武者」の異名を持つ。しかし『上田秋成全集』(中央公論社)も俳諧編は未刊行で、全注釈も未だ無い。本研究は石川真弘編「上田秋成発句集」(『ビブリア』115号、2001年)を資料として秋成の全発句を探索し、さらにその全注釈を完成させることを目標とした。

本研究を通じて、『上田秋成発句集』に漏れた句を数句加えた全235句の注釈を施し、『研究成果報告書 上田秋成発句全注釈(稿)』として編集、2020年3月に実施したシンポジウムで公表、配付した。今後、修正を施した上で出版を目指している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上田秋成の俳諧については未だ全集が刊行されておらず、小説や和歌に比して基礎的調査や内容研究において未開拓の部分が多い。研究を推進する上で基礎的な資料整備が大前提であることは言うまでもないが、本研究は、研究の両輪として、秋成の俳諧の特色を知ることも重要な意義があるという立場に立ち、現在判明している秋成の全発句に対して注釈を施すことを目的とした。

その成果『研究成果報告書 上田秋成発句全注釈(稿)』は初めての秋成発句の全注釈である。またこの研究を通じて、秋成の句詠の特色や、秋成の芭蕉批判とはうらはらな芭蕉への関心などが明らかになり、今後の研究課題も明確になった。

研究成果の概要(英文)：UEDA Akinari(上田秋成) is well-known as a novel writer for "Ugetsu-monogatari (雨月物語)", but since he was young, he has become familiar with haikai and had the nickname "Alone warrior". However, "the complete works of UEDA Akinari" (by Chuo Koronsha) has not published the haikai editions, and there are no annotated editions yet. The purpose of this research is to search all numbers of Akinari haiku phrases by using "UEDA Akinari's phrase collection" edited by ISHIKAWA Masahiro ("Vibria", No.115, 2001) and to complete all the annotations.

Through this study, we made a total of 235 annotations by adding a few missing phrases to the "UEDA Akinari's phrase collection" and edited it as "Research Results Report: UEDA Akinari phrase annotated edition (draft)", implemented in March 2020. It was announced and distributed at the symposium. In the future, we are aiming for publication of this work after making some revisions.

研究分野：日本近世文学

キーワード：上田秋成 俳諧

1. 研究開始当初の背景

上田秋成は読本『雨月物語』や『春雨物語』を始めとして、浮世草子や古典のパロディなど多くの小説作品を生み出したほか、生涯に 3000 首を超える和歌を詠み、また国学研究にいそしみ『万葉集』研究書などを執筆、本居宣長とも激しい論争を繰り広げるなど、幅広い文藝活動を行ったことが知られる。しかし、秋成はそればかりでなく俳諧にも親しみ、大坂において「独り武者」の異名を取る独自の詠風を誇り、若年時を中心に多くの句を詠んだ。近世において初めての俳諧文法書となる『也哉抄』を刊行したのも秋成であり、単なる一介の俳諧作者ではなく、連歌をも視野に入れた俳諧文法への深い知見を有する学者であったことを示している。また、旅行記『去年の枝折』や随筆『胆大小心録』などの秋成作品中に、松尾芭蕉に対する厳しい批判的言辭が散見することも周知のことである。晩年には自選句集『俳調義論』をまとめるなど、その生涯にわたって俳諧は秋成の身近にあったのである。

秋成の俳諧についての研究は明治期以来、嘗々と重ねられてきた。近年においても新出句が見出され、報告されている。しかしながら、過去に公刊された『上田秋成全集』(国書刊行会、1917～1918)や『秋成遺文』(国書刊行会、1933)に収められた俳諧は片々たるものであり、最新の研究成果を盛り込んだ『上田秋成全集』(中央公論社、1990年～)においても、現在 12 巻まで刊行されているものの俳諧篇は未だ刊行されておらず、現状において秋成の俳諧研究の基盤が整っているとは言い難い。また秋成俳諧の全注釈は未だ存在せず、日本古典文学全集などにおいて取り上げられる秋成句も限られており、秋成の俳諧研究は他のジャンルに比べて著しく立ち遅れていると言わざるを得ない。近世文藝における俳諧の重要性は言うまでもなく、秋成の作品研究においてもそれが当然の前提となるはずである。秋成の文藝の全貌を理解する上で、俳諧研究は必要不可欠である。

そこで、本研究においては、秋成の俳諧研究を推進していく足掛かりとして、まずは現在判明している秋成の俳諧のうち、発句を対象としてその全注釈を試み、秋成俳諧の特色の一端を明らかにすることとした。

2. 研究の目的

上記のごとき研究状況にあるため、本研究の基礎データとして『上田秋成全集』を用いることはできない。そこで本研究では、現在までに判明している秋成の全発句をまとめた論考、石川真弘「上田秋成発句集」(『ビブリア』115号、2001年)を基礎資料として、秋成の全発句を改めて確認し、各句に注釈を付して、最終的に全注釈書を作成することを目的とした。

未だ全集が完結していない現在、本来であれば最初に取り組みべきは、各地に点在する全作品の所在を確認、石川論考に挙げられた句を再検証し、さらに新出句の探索も行った上で、それら全資料を統合、発句の推敲の過程を明らかにし、最終句を確定するといった、基礎的で地道な作業であろう。もちろんその必要性は十分に認識しているが、それには膨大な時間と手間を要する。時間的にも限られた本研究において、そこまでカバーすることは到底不可能である。

では、そのような基礎作業を経ず、石川稿に寄り掛かった発句注釈には全く意義が無いのか。そうではないと考える。これまで、秋成句の一つ一つを取り出しての注釈は存在する。たとえば蕪村追悼句「仮名書きの詩人西せり東風吹て」などは最も著名な句と言ってよく、多くの論評がなされている。しかし、他にどのような句が詠まれ、それらの句にはどのような文学的特徴があるのか、といった全体を見渡した研究は皆無といってよい。

秋成句の特色を大づかみにでも把握することは、初めての試みである。現在判明している秋成発句全体を丁寧に注釈・研究することは、その文学的特色や秋成の俳諧観を明らかにするはずであり、秋成句を相対化して考察する際にも有益であると思われる。そればかりでなく、秋成の文学研究全体を考えた場合、秋成の他のジャンル作品の研究にも資するという研究意義が認められる。たとえば、秋成の小説に現れる俳諧に対する言説への正しい理解や、大坂騒壇における人的交流や俳壇における秋成の位置付けといった面における新事実の発見など、従来の研究では見えなかった新たな世界が展開する可能性がある。秋成の俳諧と小説との関連性は重要なテーマの一つであり、本研究は秋成の文学研究全体の広がりを含め、きわめて刺激的で重要なテーマであるといえる。

研究代表者、研究分担者は研究の始発に当たって十分に意見交換し、このような共通認識を持つに至った。その共通認識の下に、本科研においては、まず秋成全発句の分析を通じて、その特色を明らかにすることを第一の目的とした。併せて、各研究担当者が可能な限り原典に当たって石川稿を検証し、また周辺の俳諧資料を博搜して新出句の探索も行うこととした。また、全科研研究期間において蓄積した研究成果を集約し、秋成発句全注釈としてまとめ、世に出すことを最終目的とした。

また、本科研の研究の締め括りとして、最終年度にシンポジウムを企画することも目標の一つとした。シンポジウムを通じて、本科研の研究成果、および本研究によって新たに浮かび上がってくるであろう問題点を広く共有し、今後の研究の道筋を示すことは重要であると考えたからである。

3. 研究の方法

述べ来たように、本研究では、秋成の全発句を対象として各研究者がその注釈を加えていく、ということが最も基本的な作業である。そこでまず最初に、上記の石川真弘「上田秋成発句集」(『ピブリア』115号、2001年)を基礎資料として、全発句をまずは季節ごとに分類、さらにその季節の中で時代順に並べ替えた基礎データを作成した。ここに列挙された各句を研究代表者、研究分担者、研究協力者の4名で分担し、各自が担当する各句の関連資料の収集、および注釈作業を行うこととした。

最初の研究会において、発句の分担と作業方法、提出する原稿の体裁、研究会のおおよその日程などを話し合い、決定した。その後は、各自が自身の担当句について、各地の作品所蔵図書館を訪問したり国文学研究資料館のマイクロフィルム資料を確認したりして、独自に発表原稿を作成する形で研究を推進した。基本的に個人作業である。

年に数回、駒澤大学、または筑波大学に全員が参集して研究会を行った。研究会当日は、担当者が研究発表形式でそれまで積み重ねてきた研究成果を披露。発表後に、句の解釈の可否やさらに調査すべき事項などについて相互に意見交換、毎回活発な議論が交わされた。担当者は後日、研究会当日の討議結果を反映し、さらに必要に応じて追加調査も行った上で作成した原稿データを研究代表者にメール送付。研究代表者がそれらを取りまとめる形で、研究成果を蓄積していった。各分担句を調査する過程で、何句かの新出句も発見することができた。それらも当該季節のしかるべき箇所に追加していった。

最終年度の2019年秋には、研究代表者が取りまとめた全員分の研究成果(全235句)を共有してブラッシュアップを行い、体裁も整え、初句索引も作成して、研究結果報告書として全注釈(稿)を1冊の本にまとめた。

3月には以上の研究成果をもとにシンポジウムを実施した。研究成果の一部を反映した基調報告を行うと共に、研究の過程で新たに浮上した問題点を世の中に広く発信した。

4. 研究成果

上記の方法で4年間で蓄積した研究成果を取りまとめ、初句索引も付して、「研究成果報告書上田秋成発句全注釈(稿)」として令和2年(2020)2月28日に発刊した(非売品)。これは、初めての秋成発句の全注釈である。具体的な記載内容としては、全235句について出典・季語を記し、現代語訳、刊行年次、あるいは染筆年次、語釈、注解、を付した。具体例として以下に、研究代表者、研究分担者の担当句、各一句を掲載する。

○妬(ねた)もかや人のうしろにあふひ草

『寛政己酉句録』

あふひ草(夏)

妬もうかしら、葵の葉で飾られた美しい行列を人の後ろから見ることになってしまつて。

寛政元年(一七八九) あふひ草 葵。四月中の酉の日に行われた賀茂祭の葵を指す。

前書き「加茂まつりに」。五月十二日、無腸より返書、疫瘧快気のよし」との添え書きがある。賀茂祭は京都の賀茂別雷神社(上賀茂神社)・賀茂御祖神社(下鴨神社)の例祭で、別名「葵祭」とも称されるように、行列の御所車や供奉者の衣冠などに二葉葵の葉を飾る。「妬む」人の後ろ」は『源氏物語』「葵」巻と関連があろう。賀茂祭の齋院御禊の日、光源氏も供奉のため参列していた。その姿を見ようと姿をやつして見物していた六条御息所の一行は源氏の正妻の葵上の一歩と車争いを起こし、六条御息所の車は後ろへ追いやられてしまう。牛車が壊され、恥をかかされた六条御息所は屈辱の思いを抱き葵上を深く恨んだ。掲載句はこれを踏まえ、人混みに遮られて、せつかくの葵祭の行列がよく見えなかった悔しさを詠んだか。『寛政己酉句録』によれば、秋成はこの年四月二十二日に京都の几董を訪問、両吟俳諧を楽しみ、翌日は几董と橋本経亮と共に賀茂祭に出掛けているが、二十四日には「無腸不來、橋本夕方見へ噂きく。病氣に附、今朝帰村のよし」とある(頭注には「二十五日」)。あるいは賀茂祭の当日の二十三日も疫瘧(おこり)の前兆で体調が優れず、思うように観光できなかった無念さを詠んだ句とも解せようか。【近衛】

○何人(なにびと)ぞ来ては鵜川をかなしがる

『月並発句帖』

鵜川(夏)

誰だろう。鵜飼が行われている川に来ては悲しむそぶりを見せるのは。安永六年(一七七七) 鵜川 鵜を使って鮎などを捕る川漁。鵜飼。平安朝以降は、鵜飼を行う川を指す場合が多い。かなしがる 悲しい気持ちで態度に出す。前書に「五月十日兼題鵜」とある。題詠の句。金京姫「秋成発句における芭蕉の受容」(『日本語と日本文学』41 二〇〇五年八月)において、鵜飼の「悲しさ」は謡曲「鵜飼」の詞章にもあるが、この句では、芭蕉句「おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉」(『あら野』)をふまえていると指摘する。「何人ぞ」という表現も「秋深し隣は何をする人ぞ」をかすめたものかもしれない。「来ては」という表現に「またか・」というニュアンスが含まれ、やや呆れ気味な気持ちにユーモアがある。【金田】

○指きつて紅ふかき一枝かな

『俳調義論』

紅ふかき枝(紅葉)(秋)

ここ高雄山は紅葉の名所だが、紅葉の一枝を剪った罰に一本の指を切る、という罰を科した天永紅葉のためしを想起させる鮮血のような深紅の紅葉の一枝がある。文化六年(一八〇九)以前 一枝 一つの枝。宝暦元年(一七五一)十二月初演の『一谷嫩軍記』熊谷陣屋の段に見える「一枝折盗の輩においては、天永紅葉の例に任せ。「一枝を伐ば一指を剪べし」との台詞の語句を踏まえ、ここでは「いっし」と読む。底本に前書「高雄山にて天永紅葉のためしをおもふ」として掲載。鳥羽天皇が天永期に紅葉を折った者を罰した天永紅葉の例を踏まえ、切られた指から流れる鮮血のような深紅の色の紅葉を詠んだもの。【清登】

このようにして、全句に注釈を施した。この研究成果については、なお検討・修正を加えた上で、今後出版したいと考えている。

また、同年3月1日(日)14:00~17:00、駒澤大学会館246において、我々研究代表者、研究分担者のほか、外部から3人のパネラーを招き、シンポジウム「上田秋成の俳諧を考える」を開催した。シンポジウムでは、今回の研究成果を踏まえた基調報告のほか、同時代の大坂俳壇の具体相や秋成の小説における俳諧など、複合的な視点から貴重な報告がなされた。会場には俳諧研究者や小説研究者など、専門を異にする研究者が集い、それぞれの立場から多くの新鮮な発言があつて、刺激的な議論が交わされた。当日の来場者には上記研究成果報告書を配付したが、その内容を踏まえた発言もあり、大変有意義なシンポジウムとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 近衛典子	4. 巻 162
2. 論文標題 「2017年度公開講座・秋成文藝の魅力 小説・和歌・俳諧」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 女子大関文（京都女子大学）	6. 最初と最後の頁 pp1 - pp31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 近衛典子
2. 発表標題 上田秋成俳諧の特色
3. 学会等名 The 6th JSA ASEAN CONFERENCE 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 近衛典子
2. 発表標題 「秋成文藝の魅力 小説・和歌・俳諧」
3. 学会等名 京都女子大学公開講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 近衛典子
2. 発表標題 上田秋成 その人と作品
3. 学会等名 5th Biennial International Conference of JSA-ASEAN（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 金田房子
2. 発表標題 『也哉抄』の引用句例について
3. 学会等名 シンポジウム「上田秋成の俳諧を考える」(本科研シンポジウム)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清登 典子 (KIYOTO Noriko) (60177954)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	大石 房子(金田房子) (KANATA Fusako) (80746462)	清泉女子大学・付置研究所・客員所員 (32632)	